

# 第1部 グルーヴシリーズの完成

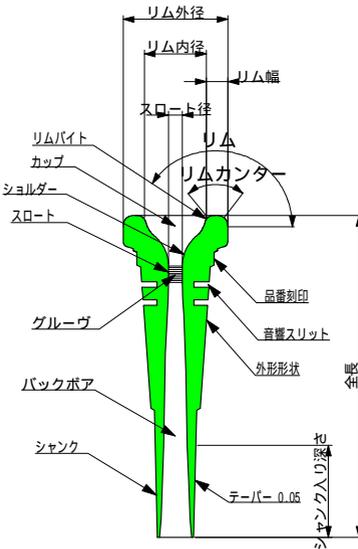
BEST BRASS は、過去の偉大な先駆者達の意味を受け継ぎ、彼らが成し得なかった、言い換えれば、**仮に彼らが生きていたら挑戦したであろう次世代のマウスピースを研究すべきだ**と考えています。一方、現在の多くのメーカーは過去の有名なマウスピースを測定し、ただコピーをするだけでその本物を越えたと自己満足しているのと同様な状況です。しかし残念ながら、それでは金管楽器界に何の進歩も期待できません。

そこでBEST BRASS は、既に海外でも広く認められる独自の音響技術と豊富な経験を基に、全く未知の世界である「次世代のマウスピース」の開発を目指し研究を進めてきました。後述する「**マルチレングスシステム**」と「**グルーヴ**」という新概念を導入した今回のBEST BRASS グルーヴシリーズの誕生で、ようやく金管楽器用マウスピースが21世紀へ突入します。

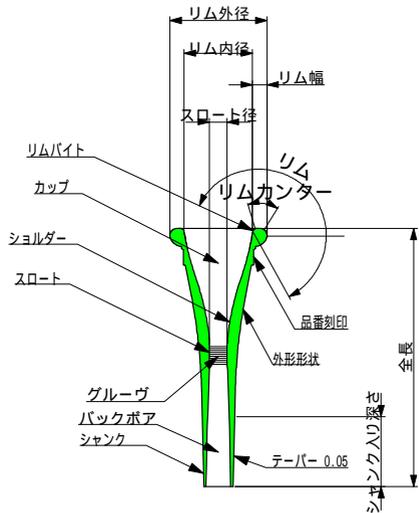
## - マウスピース各部の名称 -

これからBEST BRASS グルーヴシリーズの秘密を公開しますが、まず簡単にマウスピース各部の名称を模式図と共に載せておきます。もし読んでいる最中に分からない名称が出てきたら、一度ここで確認すると、より理解が深まるでしょう。

トランペット用マウスピースの各部の名称



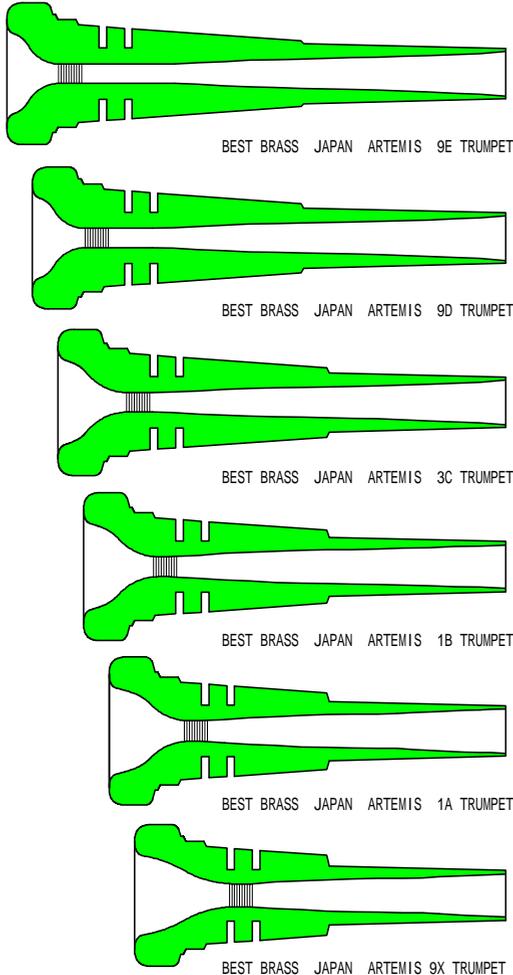
ホルン用マウスピースの各部の名称



## マルチレンジシステム

BEST BRASS は今回、マウスピースそれぞれのカップの深さ、浅さの程度に対応させてマウスピースの全長と内径を適正に設計することにより、どのモデルを使っても正しいピッチを得られる「マルチレンジシステム」の開発に成功しました。マウスピースを単独の音響部品と考えず、「**楽器本体とマウスピースが一体となって一つの音響管を構成する**」という音響理念を持つ BEST BRASS だからこそ、それを可能としたのです。まずはそのカップとマウスピース全長の関係の模式図をご覧ください。

### トランペット用マウスピースのカップと全長の関係



この「マルチレンジシステム」により、楽器本体の持つ潜在能力を最高レベルまで引き出すことが可能になります。

一般に、メーカー別に多少の差はありますが「メーカー内では楽器毎のマウスピースの長さは一定」、また「マウスピースのカップが深ければピッチが下がり浅ければピッチが上がるため、その補正は主管抜き差で行う」というのがこれまでの金管楽器界の常識です。しかし、**これらの常識をグルーブシリーズは覆します。**

そもそも、楽器本体というものは標準サイズのマウスピースの使用を前提にして設計されています。設計者は、主管抜き差の抜かれる長さを標準的な抜き代(10~20mm程度)に想定し、楽器全体の内径形状(専門用語ではメンズール: Mensur と言います)を決定します。つまり、極端に主管抜き差を抜いた(または入れた)場合の音響特性は設計上十分には考慮されません。(もちろんこれは一般的な話であり、例外もあります。)

実際、ジャズやポピュラーミュージックなどでよく使われる浅いカップを持つマウスピースでは、主管抜き差を片側 30mm も抜かなければ正確なピッチにチューニングすることができず、一方、オーケストラなどで使われる大きくて深いカップを持つマウスピースの場合は、主管抜き差を目一杯入れてもまだピッチが低いことすらあります。しかし、このような抜き代での演奏は設計の段階から十分には考慮されていないのですから、たとえピッチが合ったとしても、その楽器の持つ最高の音が出るはずがないのです。

「マルチレンジシステム」を採用したグルーブシリーズなら、どのモデルを選んでも主管抜き差を適正な抜きしろ(片側 10~20mm程度)にした状態で正しいピッチが得られます。技術的に言えば、音響管の共振特性通り最も効率的に鳴るポイントで演奏できるため、最高の音を最も自然に引き出せるということは疑う余地もありません。

演奏家ならば誰もが、「この楽器の持つ最高の音を出したい」と常に思っているはずですが、現実にはそのことを考慮していない既存のマウスピースによりピッチや音程バランスが狂い、それらを修正しながら演奏するため、音を犠牲にせざるを得なかったとも言えるでしょう。**演奏家にとって、音こそが掛け替えのない宝物であると BEST BRASS は考えています。**

また、多くの演奏家にとって「見た目」も重要であるということも事実でしょう。ピッチを正確に合わせるには主管抜き差をたくさん抜かなければならないのだけれど、『こんなに抜いたのでは格好悪いし、他の人と同じ程度に抜き代をキープして、後は口で調整してしまおう』と思ったことがある方は多いはずですが、それは楽器に嘘をついた演奏なのです。もし彼らがその様なことを気にせず普段通りの演奏ができれば、より素晴らしい音が出せることは言うまでもありません。グルーブシリーズならば、それが可能になるのです。

## グルーヴ

「グルーヴ：GROOVE」とは、「レコードなどの溝」という意味と「楽しむ。愉快である。うまくいく」という2つの意味を持つ英語です。BEST BRASSは、スロートの一部に細かい溝状の構造を持たせ、それを「グルーヴ」と命名しました。グルーヴシリーズのマウスピースをカップ方向から見ると、スロートの入り口に細かい溝が見えると思います。それこそが「グルーヴ」です。この新発明により、従来品に比べ圧倒的な唇疲労の緩和(軽減)、音域の拡大、更には堂々とした音色の獲得をも実現しました。最も分かり易い特長は、**誰でも今まで出なかった高音や低音が安定して出せるようになる**ということでしょう。

これらの優れた効果を発揮させる「グルーヴ」ですが、その役目は「唇を楽に振動させるための適度な反射圧(吹奏抵抗)を発生させること」です。

ここで「適度な反射圧」について説明しておきます。低音域では唇はゆっくり振動し、その時の唇に対する反射圧は比較的低い状態です。一方、高音域では唇は速く振動し、その時の唇に対する反射圧は比較的高い状態となります。つまり、音の高さに依って最適な(唇が楽に振動する環境)反射圧があるのです。これに加えて音量(唇の振幅)の条件なども関わってきますが、「出したい音で唇が最も容易に振動できる環境が整った状態の圧力」が「適度な反射圧」です。

グルーヴの生み出す心地良い抵抗に慣れ、唇が楽に振動する状態を覚えてしまえば、今よりも非常に効率的な吹き方が可能となり、驚異的な耐久力が獲得できます。それに伴って、さらなる音域の拡大、そして堂々とした音色の獲得もできるのです。楽器本体もマウスピースも、**いかに最少の労力で最大の音量を得られるかは非常に重要なこと**なのです。

もし、あなたが楽器を始めたばかりの初心者であるならば、グルーヴシリーズに出会うのが早いに越したことはありません。特に学校などでは、誰よりも早く上達し楽に高い音が出せるようになるでしょうから、一目置かれる存在になるでしょう。そして、更なる上のレベルを目指す演奏家や、未来の大演奏家のタマゴである金管楽器を専攻する音大生などには、その努力に見合った絶大なる効果を発揮するでしょう。豊かで堂々とした音色、そして疲れにくいグルーヴシリーズのマウスピースはあなたの芸術の幅を更に広げます。また、もしあなたが既にプロ奏者であるならば、いかにグルーヴシリーズが素晴らしいマウスピースであるかを理解しても、仕事の忙しさや長年使用してきたマウスピースに合うように自分の奏法を確立してきたために、グルーヴシリーズに慣れるのが困難な状況もあるかも知れませんが、是非試してみてください。「既に現役を退いた」という大御所の方はグルーヴを味方にする事で若い頃のように演奏することが可能になる場合もあるでしょう。歴史を思い出してください。約90年前、Vincent Bach氏が当時では画期的とも言えるマウスピースを開発しましたが、当時のプロ奏者達も、彼の新しいマウスピースに慣れるのには時間が掛かってしまったものです。

グルーヴシリーズの核とも言えるこの「グルーヴ」はあなたの上達を現実のものとし、同時に正しい奏法を自然に見に付けることができるのです。まずは実際にグルーヴを体感してみてください。圧倒的に高性能なグルーヴシリーズの性能に驚き、そしてあなたの音楽が“グルーヴ”し始めるでしょう。



スロート部に見えるグルーヴ

## 吹奏抵抗について

ビジュアライザーというものがあります。これは、マウスピースのリムのみを棒の先に付けたもので、バズィング(buzzing)の様子を確認するための道具なのですが、これを用いて普段通りの演奏(バズィング)をすることは実際には不可能です。使ったことのある方は分かると思います。では、なぜ普段通り演奏できないのでしょうか。それは、ビジュアライザーにカップもスロートもついていないからです。カップもスロートもついていないと、バズィングの際に必要な「唇を振動させるための反射圧(吹奏抵抗)」が得られないのです。これは逆に「マウスピースにカップやスロートが存在するからこそ、バズィングが可能」とも言えます。金管楽器の演奏には唇の振動を助けるための適度な吹奏抵抗(反射圧)が絶対に必要なのです。

では吹奏抵抗はどこで発生させるべきなのでしょう。例えば「どここのメーカーの楽器は適度な抵抗があって吹き易い」と言う人が多いですが、それは間違っているということをご認識する必要があります。確かに、100年も前から何の変化も見られない現在のトランペットのバルブ部分には、ピストンの内筒管内部が極端に凹んだ箇所が多数存在し、更にその無理やり曲げられたバルブ内部の管路はある種の吹奏抵抗を発生させることは事実です。しかし、その抵抗は全ての音に対して均等に与えられるものではありません。それらは、むしろ音に悪影響を及ぼす無益な抵抗でしかなく、いわゆる鳴りムラを引き起こす原因でしかありません。実際、今現在このバルブの問題を解決したものはBEST BRASSのトランペットAIOLIA/ARTEMISに搭載された「HAMANAGA VALVE」しか存在しません。

また、重い楽器は吹奏抵抗が強いという先入観があるようですが、それも捨てなければいけません。そういうことを言う人は、実際には吹いたことが無いに違いありません。吹いたことがあるのだとすれば、その楽器の質が悪いのか、その人が楽器の判断を正しくできないということになってしまいます。確かな音響理論に基づいた上で楽器の重量を増加させる、または支柱を適宜追加する、ということは音を効率良く鳴らすための一つの手段なのです。

少し長くなってしまいましたが、結論として、効率的に唇を振動させるための吹奏抵抗(反射圧)を発生させるべき場所は**マウスピースのカップ及びスロート部**であると断言します。カップとスロート部は、**楽器とマウスピースを1つの音響管として見た際、全ての音で常に音圧が最大であり、且つ、呼気の圧力も最大な唯一の場所**なのです。だからこそ、今回のグルーヴシリーズではスロート部にグルーヴを設け、これまでになかった唇を効率よく楽に振動させる適度な吹奏抵抗(反射圧)をグルーヴが発生させているのです。そしてそれは先に述べたような見事な効果を実現します。



(ビジュアライザー)